

①取り戻さなければならないもの

いま、縄文土器と縄文土偶が、世界の注目を集めています。今年の9月11日から11月22日まで、大英博物館で「土偶展」が開催されます。火焰型土器をはじめ日本の縄文文化の遺物が海外で展示されるのは今回で何回目でしょうか。日本で縄文文化に関する催しがフォーラムや体験学習などのかたちで盛んにおこなわれていますが、それにも益してヨーロッパの人々の心を惹き付けています。しかもこの縄文文化への関心の高まりは一過性のものではないようです。何故でしょうか。

おそらくこの動きは、急速な経済成長のなかで物質本位の価値観しかもてなくなった私達が「置き忘れてきたもの・見失っていたもの」を取り戻したいという、強い願いの表れのようにです。「置き忘れてきたもの・見失っていたもの」とは、「こころ」と「自然」です。縄文文化は「自然」との共生から生み出された世界観の下で、約1万3千年もの長きにわたり営まれた誇り高き「こころ」の文化です。そこで、縄文土器と縄文時代のことを少しだけお話ししましょう。

②縄文土器

縄文土器と呼ばれる野焼の土器があります。野焼の土器というのは、粘土に砂などを混ぜて作り上げた器(深鉢・浅鉢など)を、普通の焚き火で焼き上げた(酸化焰焼成)ものです。須恵器や陶磁器のように窯に入れて高温で焼いた(還元焰焼成)ものとは色も堅さも大きく異なり、もろくて軟らかい赤褐色の土器です。縄文土器も弥生土器も土師器も、みな野焼の土器です。最近になって縄文土器の出現が約1万5~6千年前にまで遡るといわれるようになりました(AMS歴年代較正)。煮炊き用に生み出されたこの土器の形は「深鉢」と呼ばれ、最初は砲弾のような丸底や尖り底で、文様も単純で簡単なものをつけられていました。それが長い時の流れの中でダイナミックに変化し続け、底も平らになり文様も複雑で抽象的なものへと展開してゆき、世界に類をみない独創的で個性味豊かな「縄文文化」の象徴となりました。

考古学では縄文時代を、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6つに区分しますが、縄文土器が各地域ごとに強い特色を持ち、文様も最も華やかになるのは中期で、約5000年前から4000年前のほぼ千年間に該当します。この時期に栄えた代表的な村に、青森市の三内丸山遺跡や函館市の大船遺跡などがあげられます。土器では、新潟県の信濃川流域に多くみられる火焰形土器があげられます。

さて、躍動感あふれるエネルギッシュな縄文土器を、日本考古学の父ともいべき浜田耕作は、考古学の貴重な研究資料であるとともに美術的思想の表れでもある、と指摘しました。また、これらの縄文土器に人の命の根源とその神秘の凝集を強烈に感じ取った芸術家岡本太郎は、美術品の傑作として高く評価すべきことを一般に広く知らしめました。

③縄文文化を築いた人々

これらの土器を、水稻農耕の定着(弥生時代)まで約1万3千年もの長きにわたり作り・使い続けた人々。度重なる気候・環境の変化を逞しく乗り越え、自然との共生社会を確立・維持し続けた人々。その人々が私たち日本人の祖先です。同じ土器文化が1万年以上も続いたのは、世界の歴史の中で唯一「縄文文化」だけです。この崇高な祖先の文化を、日本の教科書ではほとんど扱っていません。それはとりもなおさず、日本列島に花開いた祖先の誇り高き文化を学校で教えないという、我が国のお粗末な教育事情を世界の国々にさらけ出していることです。縄文文化は「エコの原点」であり「美術の淵源」であり、そして「自然との共生の指針」なのです。だからこそ世界の人々が注目しているのですが……。

ところで、縄文時代というと「未開」で「野蛮」というイメージを抱く方が、未だにかなりの数いらっしゃいます。確かに物質面では貧しく、石や木の道具しかない狩猟採取生活です。当然、現代の生活からすれば「未開」に違いありません。しかし、彼らは、自然を破壊することなく共存・共生の道を確認しています。それを現代の私達と対比したとき「未開」の一言ではかたづけられないのではないのでしょうか。また、北海道虻田町の入江貝塚で見つかった人骨は、小児期にポリオにかかり、寝たきりの状態で20歳頃まで生きながらえていたことが判明しています。これは身体障害者を手厚く介護していた証拠です。わが子を虐待死させる歪んだ心をもつ現代の親と比べて、どちらが「野蛮」なのでしょう。更に、人間の最も野蛮な行為とは殺戮を繰り返す戦争です。縄文時代にそのような痕跡はありませんが現代はどうでしょう。心は荒廃し、物質本位にすべての優劣や貧富を判断しようとする私達現代人。「未開」「野蛮」は、現代人に最も当てはまり、現代にしか通用しない言葉のような気がします。

さて、縄文時代の作品の中で国宝に指定されているのは土偶3点・土器1点の4点です。ここでは新潟県十日町市笹山遺跡から出土した縄文中期の国宝「火焰形土器」をみてみましょう。この形と装飾の織り成すバランスは“静”と“動”において完璧という外はありません。しかも現代作品のような個の感性による一個人の心の表現ではなく、集団の感性による集団の心の表現なのです。だから誰もがその文様の意味を理解し、同じものを沢山作ることができたわけです。漠としか解かりませんが、火焰形土器には“魂・命・精霊・畏怖・祈り”が表象されているように思われます。岡本太郎ならず誰しも、この野焼の土器に秘められた高次の精神性に息を呑むに違いありません。これが私達の祖先の「こころ」の表れであり「自然」との共生から生み出された精神活動の産物なのです。ここに現代文明が失った高次の精神文化と崇高な哲学を看取るのは私だけではないでしょう。

④おわりに

私達は今、地球規模での危機に直面し自然との共生とかエコ問題に真剣に取り組み始めました。しかしその前に、縄文文化を知ることが大切です。縄文文化に世界の人々の関心が集まっているのは、「自然」を消し「こころ」の荒廃を招いてしまった現代を、多くの人々が反省し始めたことにあるようです。未来、それは縄文という過去が教えてくれます。